地域とともに歩む鷹生ダム（前編）

鷹生ダム建設事業を振り返る

ダム建設前の写真

最高水位到達時の写真

鷹生ダムが完成した。建設事業がスタートしたのは平成元年度、以来18年間の長い歳月をかけての大規模事業が節目を迎えた。この間、多くの皆様の協力を得て完成した鷹生ダム建設事業を振り返り今後の事業に活かしてもらおうと、「鷹生ダム工事誌」に寄せられた寄稿などを中心にまとめたレポートです。5月号、6月号で2回に分けて掲載します。

編集：前鷹生ダム建設事務所（現釜石地方振興局水産部）技師　藤原　慎

鷹生ダムの概要

鷹生ダムは、五葉山を源として流れる二級河川盛川水系鷹生川に建設された多目的ダムである。

盛川沿川は昭和52年、54年の大雨等により家屋、田畑の浸水や河岸の決壊など大きな被害が発生した。また、昭和48年の異常渇水では給水制限が発令されるなど治水・利水面において非常に不安定な土地であった。

昭和52年5月15日豪雨被害

異常渇水
非常事態宣言
節水を呼びかける
プールも使用禁止
長びけば 自衛隊出動も

昭和48年異常渇水新聞記事

これまでも、河川改修などは行ってきているが、県ではこのような状況を踏まえ昭和53年度からダム建設の基礎となる「予備調査」に着手し、昭和60年度に「実施計画調査」、平成元年度に建設採択を受け、ダム建設に本格着手した。大船渡地域の治水・利水に新たな「風」が吹き込んだ。

鷹生ダム建設の目的は以下の3つである。

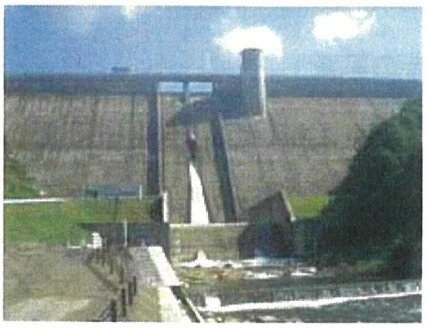
1　洪水調節：鷹生ダムで洪水調節を行い、盛川沿川地域の水害を防除する。

2　河川環境の保全：盛川沿川の既得用水（農業用水等）の補給及び河川流量が減少した時に鷹生ダムより補給する。

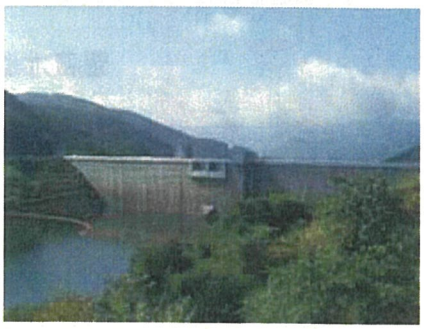
3　水道用水：大船渡市に対し新たに4,630 ㎥/日（0.054 ㎥/ｓ）の取水を可能にした。

鷹生ダムデータ

水系　：二級河川盛川水系鷹生川
堤高（ダムの高さ）　：77.0m（太平洋セメント煙突の高さの約半分）
堤頂長（ダム天端の長さ）　：322.0m
総貯水量：9,680,000 ㎥（25mプールで約30,976杯分）
堤体積（ダム本体の体積）　：328,000 ㎥（ミキサー車で約82,000台分）
総事業費（付替道路建設費用やダム本体建設費用などの合計）：325億円



ダムを下流側から望む



ダムを右岸上流から望む

鷹生ダムの周辺環境

鷹生ダムがある大船渡市日頃市町は、岩手県沿岸南部の最高峰五葉山の麓に位置しており、周辺は県立自然公園に指定されるなど自然豊かで風光明媚な場所である。五葉山の登山口となる赤坂峠にはつつじの群落、登山道の途中にはしゃくなげの群落がある。また、鷹生ダム直上流には沿岸部で始めて湧出した温泉「五葉温泉」があり、鷹生ダムや周辺の壮大な自然を見ながら入浴することが出来る。

しゃくなげの湯っこ五葉温泉

五葉山のつつじ

新生! 鷹生ダム建設事務所スタート

平成元年 4 月、北栃啓輔（きたとち　けいすけ）は鷹生ダム建設事務所の初代所長として大船渡市に赴任した。当時の建設事務所は、国道 45 号沿いにある小さな建物。しかし仕事の内容は移転者の生活再建という大きな仕事が待ち受けていた。

「移転者の皆さんには長年住み慣れた土地から移転をお願いしなければならない」、北栃は大事業に誠心誠意取り組むことを決意した。

地元大船渡市も鷹生ダム建設促進のために組織体制を準備していた。建設事業のバックアップを行う「ダム対策室」を設置し、職員体制もベストメンバーを配置するなど協力体制をとった。

「移転者の不安を取り除くには何が必要か？」。北栃は県営ダムとして１２年に竣工した早池峰ダム（花巻市大迫）の事例を参考にしながら日々の業務を行った。他県への先例地視察、腹を割っての率直な意見交換。移転者は生活再建に対する不安や心配事が多くある。それに対して北栃は誠心誠意応え、移転に対しては概ねの了解を得た。

次にやるべき仕事は、移転者 8 戸の移転先を決定することであった。移転者は 8 戸が同じ場所に移転することを強く望んでいたが、移転先の候補地は「帯に短し襷に長し」のような場所であった。大船渡市内の地図を片手に管内を走り回った。そして立根川上流付近に適地を見出した。これが現在の移転先となっている。北栃は、２年間で補償段階の基礎を固めて平成 3 年 3 月大船渡市を去った。

五葉山に御礼登山・用地補償調印成る

渡辺寛（わたなべ　ひろし）は平成 3 年 4 月、所長として鷹生ダム建設事務所に赴任した。渡辺に課せられた命題は用地補償基準の妥結。補償の基礎は、前任の北栃に固めてもらったが、買収単価については提示を行っていない。また、補償基準妥結調印式には、移転者の皆さんと知事の出席が予定されていることもあり、スケジュールの確保も行わなければならない。渡辺の頭の中にはいろいろな思いが巡った。

渡辺はその不安を断ち切るべく仕事に取り掛かった。最初に提示する買収単価の詰めを行った。地権者の皆さんが納得する単価と補償基準の両方を見据えながら、所内で何度も検討を行い関係機関との協議を行った。「用地担当者には苦労をかけた」と、述懐する。

買収単価を地権者会に提示する日が来た。用地担当者に多くの苦労をかけ関係機関と何度も協議した単価ではあったが、少々の不安もあった。同時期に進んでいた三陸縦断道工事の買収単価は、ダム建設事業の単価に比べて高めに設定されていた。しかし、補償基準をはずしての提示は出来ない。

渡辺は、単価提示の場で「この価格は、誠心誠意出せる最高限度であること、値上げ要求を見込んで控えめに出したものではないこと、これ以上の要求は受け入れられないこと、ダム事務所を信頼してほしいこと」を地権者に話した。

単価提示から 1 ヶ月が経過した。何も回答がないこう着状態が続いていた。渡辺は不安とあせりが募ってきた。「この事態を何とかしなければ」渡辺が取った行動は、地権者会幹部と腹を割って話し合いを行うこと。夜遅くまで話し合った。この話し合いがきっかけで事態は一気に補償妥結の方向に向かい動き出した。補償受諾の連絡を受けたのは調印式の 2 週間前だった。

平成 3 年 9 月 25 日、鷹生ダム損失補償基準の調印式が行われた。建設事務所職員は、万感の思いで調印式を見守った。いろいろな思いが巡る。その日の夜は、久しぶりにうまい酒を飲んだという。

「私たちは、五葉山の神様に守られて暮らしてきました。この地を離れるにあたり御礼を申し上げてきたい。」地権者の登山にも同行した。地権者が今まで住んでいた土地への思いが伝わってきた。渡辺は補償基準を纏め上げて平成 5 年の春、新しい赴任地に旅立った。

調印式

五葉山登山

移転の記
我がふるさと
日頃市町上甲子
おせあぐら（大沢倉）より
鷹生ダム建設に伴い
この地に移転す
平成四年三月

橋名板に地元中学生の作品を起用・付替道路工事が本格化

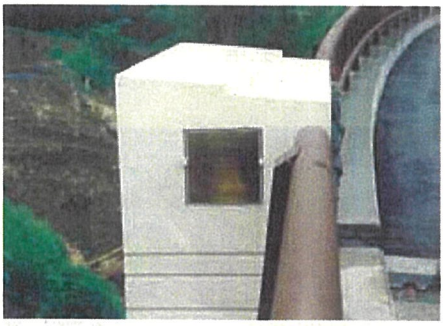
平成５年４月、笹岡富男（ささおか　とみお）が赴任した当時は、補償基準が妥結し付替道路工事が本格化していたときだった。

笹岡は北栃、渡辺が築き上げた地域との信頼関係をさらに強め「地域に親しまれる道路づくり」を目指してさまざまな取り組みを行った。付替道路の橋梁親柱の題材に地域の「郷土芸能」、高欄（橋の手すり）の題材に地域の植物を用いたデザインや、橋名板には地元日頃市中学校の生徒の作品を採用した。同時に橋梁の親柱をタイムカプセルとして利用し、日頃市中学校の生徒全員の作品を保存した。開封は西暦 2030 年。そのときは鷹生ダムが地域と一層とけあったダムになっているだろうと笹岡は思っている。

笹岡はダム原石山（ダムコンクリートを製造することに必要な原料を採取する山）や建設発生土受入地の跡地利用なども手がけた。

現在、建設発生土受入地跡には岩手県沿岸地域で初めての天然温泉となる「五葉温泉」が営業し盛況を博している。笹岡が在籍した当時では予想だにしなかった光景であったという。このプロジェクトに携わったものとして感無量であった。笹岡は、地域との絆を深めた３年間を振り返りながら大船渡市を去った。

日頃市中学校生徒と記念撮影



タイムカプセルの入っている親柱

付替道路工事が最盛期・ダム本体工事へ準備着々

建設事業が８年目を迎える平成８年４月、橋本義春（はしもと　よしはる）は所長として鷹生ダム建設事務所の業務に就いた。

橋本が赴任した時期は、付替道路工事の最盛期、さらに本体発注の準備に取り掛かっており事務所内は活気に満ちていた。それとは裏腹にバブル景気が崩壊し公共事業に厳しい目が向けられてきたときでもあり、計画的な予算の確保が困難な事態も発生していた。土木事業に対する財政環境が変わりつつあった。

厳しいことばかりではない。歴代の所長が醸成した地域との交流が盛んに行われ、橋本も交流の輪に飛び込んだ。地域と一体となったダム事業の推進を肌で感じることが出来たと同時に、この厳しい情勢を踏ん張りぬいて事業を推進しようと思った。

橋本は、付替道路工事の仕上げ及び本体発注準備の基礎をつくり、平成９年３月、次の赴任地に向かった。

１０年目・鷹生ダム本体工事始まる

佐藤喜弘（さとう　のぶひろ）が鷹生ダム建設事務所長に就任したのは平成９年４月。事務所は本体発注の積算と付替道路工事の完成に向けあわただしさを増していた。

翌10年７月、待望の鷹生ダム本体の工事が始まった。鷹生ダム建設事業が開始された平成元年から数えてちょうど10年目を迎えていた。ダムの建設期間は平成19年３月までが予定されており、長いようで短いダム本体工事の始まりだった。

佐藤には忘れられない言葉がある。鷹生ダム建設工事を担当する共同企業体の森所長の言葉だ。「我々土木技術者には、自然を征服するとか、自然に挑戦するなどと思っている人はいませんよ。だって向こうは何億年の単位なんです。征服できるはずがありません。我々はささやかな人間の営みのため、自然の片隅をお借りして仕事をさせてもらっているのだと思っています。そして50年後か100年後かこのダムが何時かこの山の風景にとけこみ、ひとつの懐かしい風景となることを願っています。」

自然界から見れば人間が生まれてから死ぬまでの期間は、ほんの一瞬であるだろう。その一瞬の中での行為により自然と調和したものを創ることが出来るか、または取り返しのつかない事態に陥るのか改めて考えさせられた。佐藤は、付替道路（県道）の完成と本体工事の開始を見届け平成11年３月離任した。

完成した付替県道

堤体工起工式